

二〇一九年度二松学舎大学主催

全国学生・生徒

文芸コンクール

入賞作品集



はじめに

学長 江藤 茂博

二松学舎大学主催の全国学生・生徒「文芸コンクール」が本年度も開催され、全国から多くの大学生や小中高生から、たくさん作品が送られてきました。昨年度同様に、漢詩部門、書道部門、小説POP部門、学内感想文部門に分けて募集したところ、どの部門にも多くの力作が寄せられました。

二松学舎大学は、現在は2学部5学科の文科系大学ですが、その出発は漢学塾として創設されて、それから国漢領域だけの旧制専門学校となり、一九四九年からは文学部のみ単科大学の時代が長く続きました。文学部は本年で開学七〇年となります。この間にも、多くの高校中学の国語科教員を輩出してきました。このような歴史を持った二松学舎大学の教育研究の根幹にある、表現や文芸の教育力というものを、社会に広く提供したいという私どもの思いが、この「文芸コンクール」です。世の中にはさまざまなコンクールがありますし、それらを通して多くの才能が見出されています。

この「文芸コンクール」もまた、大学という教育研究機関を通して、若者の才能を発見していきたくて考えました。数多くの文学賞のように、作家や評論家が見出す才能もあるでしょう。この「文芸コンクール」は、そうした視点とはやや異なっています。つまり、大学という教育研究機関だけ

らこそ発見できた君たちの才能というものが、きっとここにはあると思います。

もちろん「賞」を授かるということは、誰にとつても名誉なことです。でも、どんな「賞」でも、それは過去の実績に対する評価です。言うまでもなく、未来まで約束された君たちの評価ではありません。皆さんは、これまでのことにとらわれないで、さらにその先に向かって、ご自分の能力をもっと伸ばして欲しいのです。その契機となる「賞」だと考えていただきたいと私は思います。そして、さらにその先に向かわれることを期待して、皆様に、「受賞おめでとう」という声をかけさせてください。受賞者の皆さんだけでなく、今回は残念ながら受賞できなかった皆さんも、共にこれから大きくご自分の才能を伸ばされることと思います。何よりも君たちに自分を試す機会を、二松学舎大学が提供できたのだということを、私どもの喜びとしたいと思います。

目次

はじめに	1
募集概要	5
漢詩部門 学生(大学生)の部	
最優秀賞	8
優秀賞	8
佳作	9
入選	10
漢詩部門 生徒(高校生・中学生)の部	
最優秀賞	12
優秀賞	13
佳作	14
入選	15
書道部門 学生(大学生)の部	
最優秀賞	17
優秀賞	18
佳作	19
入選	20
書道部門 生徒(高校生)の部	
最優秀賞	22
優秀賞	23

入選	46	小説POP部門	入選	40	書道部門 児童(小学生)の部	入選	30	書道部門 生徒(中学生)の部	入選	25
佳作	46	最優秀賞	佳作	39	最優秀賞	佳作	29	最優秀賞	佳作	24
優秀賞	44	優秀賞	優秀賞	38	優秀賞	優秀賞	28	優秀賞		
最優秀賞	42	最優秀賞	最優秀賞	37	最優秀賞	最優秀賞	27	最優秀賞		
学内感想文部門										

二松学舎大学主催 全国学生・生徒 文芸コンクール募集概要

募集内容

○応募資格

大学生、高校生、中学生、小学生

○募集部門

漢詩部門

- ・ 七言絶句 ※投稿は、一人三首まで
- ・ 自由課題

(一) 学生 (大学生) の部

(二) 生徒 (高校生・中学生) の部

〈応募数132作品〉

書道部門

・ 用紙サイズ「半紙」

(一) 学生 (大学生) の部

自由課題。

(二) 生徒 (高校生) の部

古典臨書 (漢字・仮名) の中から自由課題

(三) 生徒 (中学生) の部

指定課題「輝く未来」または自由課題

(四) 児童 (小学生) の部

指定課題「かお」(一年生)、「あき」(二年生)、「真心」(三年生)、

「令和※令の字も可」(四年生)、「初志」(五年生)、「学問の道」(六年生) または自由課題

〈応募数2,223作品〉

小説POP部門

・あなたが「最もお薦めしたい小説」を紹介したPOP（広告）。A5サイズ。
（応募数861作品）

○賞・賞品

最優秀賞 各部門一点 賞状、盾及び賞品（書道部門は作品の表装）
優秀賞 各部門二点 賞状、盾及び賞品（書道部門は作品の表装）
佳作 各部門三点 賞状、及び賞品

○主催

二松学舎大学

○後援

文部科学省
毎日新聞社
日本経済新聞社
（一社）漢字文化振興協会
全国漢文教育学会
全国高等学校国語教育研究連合会
全日本漢詩連盟
（公社）全日本書道教育協会
二松学舎松苓会

○協賛

アサヒ飲料株式会社
株式会社 大塚商会
株式会社 三省堂書店
ステッドラー日本株式会社

漢詩部門
学生（大学生）の部

最優秀賞 該当作品なし

優秀賞

安田女子大学 四年 川本和美

九日

九日

雨霽友來黃菊鮮

雨霽れ友来りて黄菊鮮やかなり

閑談清話醉芳筵

閑談清話芳筵に酔ふ

寒蛩冷韻西風夕

寒蛩冷韻西風の夕べ

再會約言孤月前

再會約言す孤月の前

優秀賞

岐阜女子大学 三年 佐藤菜緒

新春

新春

瑞氣暗香江上梅

瑞氣暗香江上の梅

元宵故友抱樽來

元宵故友樽を抱きて来る

微醺忽忘望鄉念

微醺忽ち忘る望郷の念

満座和顔笑語廻

満座の和顔笑語廻る

講評

前半の「黄菊」「清話」「芳筵」などの語の明るいイメージから、「寒蛩」「冷韻」「孤月」などの暗いイメージの語への変化がおもしろい。機知の光る作である。

講評

新春らしい瑞和の気に満ちた詩である。転句の微醺を帯びて望郷の念を忘れるという転換が自然に出て、よい詩になっている。

佳作

法政大学 三年 上野 尚

帰郷送年

帰郷年を送る

辭官帶荷下扁船
早曉故郷望雪巔
俱會兒孫歡菽水
寒燈耿耿送殘年

官を辭し荷を帯びて扁船下る
早曉の故郷 雪巔を望む
俱に会して 兒孫菽水を歡ぶ
寒灯耿々 殘年を送る

佳作

二松学舎大学 二年 木村 洸之

秋夜対月

秋夜月に対す

蕭瑟南樓木葉飄
清寒顥氣一天遙
秋聲寂寂孤燈下
今夜月前魂欲消

蕭瑟たる南樓 木葉飄る
清寒たる顥氣 一天遙かなり
秋声寂々 孤灯の下
今夜月前 魂消えとす

佳作

安田女子大学 三年 松本 寧々

客中作

客中の作

夜深烟月照長松
客舍中庭聞亂蛩
独在異郷消息斷
思親回首黯銷魂

夜深く烟月 長松を照らす
客舍中庭 乱蛩を聞く
独り異郷に在りて 消息断へ
親を思ひ首を回らせば 黯銷魂へ

【入選】

「秋夜」

安田女子大学

四年

石井綾瀬

「客秋」

岐阜女子大学

三年

大道桃子

「夏日偶成」

二松学舎大学

一年

田賀豪

「秋夜」

安田女子大学

三年

本山由香里

漢詩部門
生徒
(高校生・中学生)
の部

最優秀賞

仁愛女子高等学校 一年 永田 みなみ

水村夏夜

江風吹面暗涼通

江風面を吹き暗涼通ず

橋畔螢飛幻夢中

橋畔螢は飛ぶ幻夢の中

幽岸蕭條秋已近

幽岸蕭条として秋已に近し

月光如鏡水天同

月光鏡の如く水天同じ

講評

川べりの村で、夏の夜がどんな風景かを詠じた詩である。先ず川風が顔を吹き昼間の暑さを払ってくれたが、橋のそばで飛ぶ螢は夢のようだ。このような静かな岸べに居ると、すでに秋になったかと思われる。その証拠に澄んだ鏡のような月が天で輝き、水に映っているとした。分り易く、品の良い詩である。特に、月の美しさが天にあるだけでは平凡で水の上にもあるとしたのは面白い着想である。唯、転句の「幽」と「蕭条」は重複だった。

優秀賞

仁愛女子高等学校 一年 荒川日奈

水村夏夜

水村夏夜

雨後江亭燈一籠

雨後の江亭灯一籠

清輝明滅映疎篷

清輝明滅して疎篷に映ず

騷人獨坐涼風底

騷人独り坐す涼風の底

河漢西流月似弓

河漢西に流れ月弓に似たり

優秀賞

仁愛女子高等学校 一年 増田穂花

夏日偶作

夏日偶作

夏夜江村風意柔

夏夜江村風意柔らかに

長隄散策數螢流

長隄散策すれば数螢流る

渡頭靜聽淙淙響

渡頭静かに聴く淙々の響き

柳岸涼催月色幽

柳岸涼は催し月色幽なり

講評

雨が上った川べりの建物にポツンと灯が点り、その清光が篷を照らしているが、作者は涼しい風を受けている。見上げると天の川が流れ、三日月が出ていると詠んだ。爽やかさが感じられるが、「江亭」と「篷」の取り合せに少々疑問が残る。

講評

この詩の題は「夏日偶作」だが、前の二人と同じ夏夜である。夏の夜、川べりの村で穏やかな風が吹き、隄には螢が飛んでいる。川の流れの音はさらさら、柳が生えている岸で見上げるとほのかな月が出ているという静けさを感じさせる。「渡頭」「柳岸」の二つの場所を出す必要はない。

佳作

仁愛女子高等学校 一年 石黒 ひなた

池亭消閑

轟轟紅蓮浸碧漣
早朝池畔噪殘蟬
草堂橫臥忘三伏
一枕清風居似仙

池亭消閑

轟々たる紅蓮碧漣に浸し
早朝の池畔残蟬噪ぐ
草堂に横臥し三伏を忘る
一枕の清風居仙に似たり

佳作

仁愛女子高等学校 一年 栗塚 瑠那

水村夏夜

幽人獨歩水雲郷
十里長隄月色涼
螢影兩三流去好
柳邊露冷夜蒼蒼

水村夏夜

幽人独り歩す水雲の郷
十里の長隄月色涼し
螢影兩三流去好ろし
柳辺露冷ややかに夜蒼々

佳作

仁愛女子高等学校 一年 田中 麻菜

夏日偶吟

籬邊旦旦碧花開
庭樹蟬鳴涼自催
檐馬丁東天籟裏
山居渾是作詩媒

夏日偶吟

籬辺旦々碧花開き
庭樹の蟬鳴涼自ら催す
檐馬丁東天籟の裏
山居渾て是れ詩媒と作る

【入選】

「夏日偶作」

仁愛女子高等学校

一年

木村 咲月

「雨後」

仁愛女子高等学校

一年

白木 梨紗子

「夏日閑適」

仁愛女子高等学校

一年

西川 尋乃

「消夏雜詩」

仁愛女子高等学校

一年

堀田 瑠依

「消夏雜詩」

仁愛女子高等学校

一年

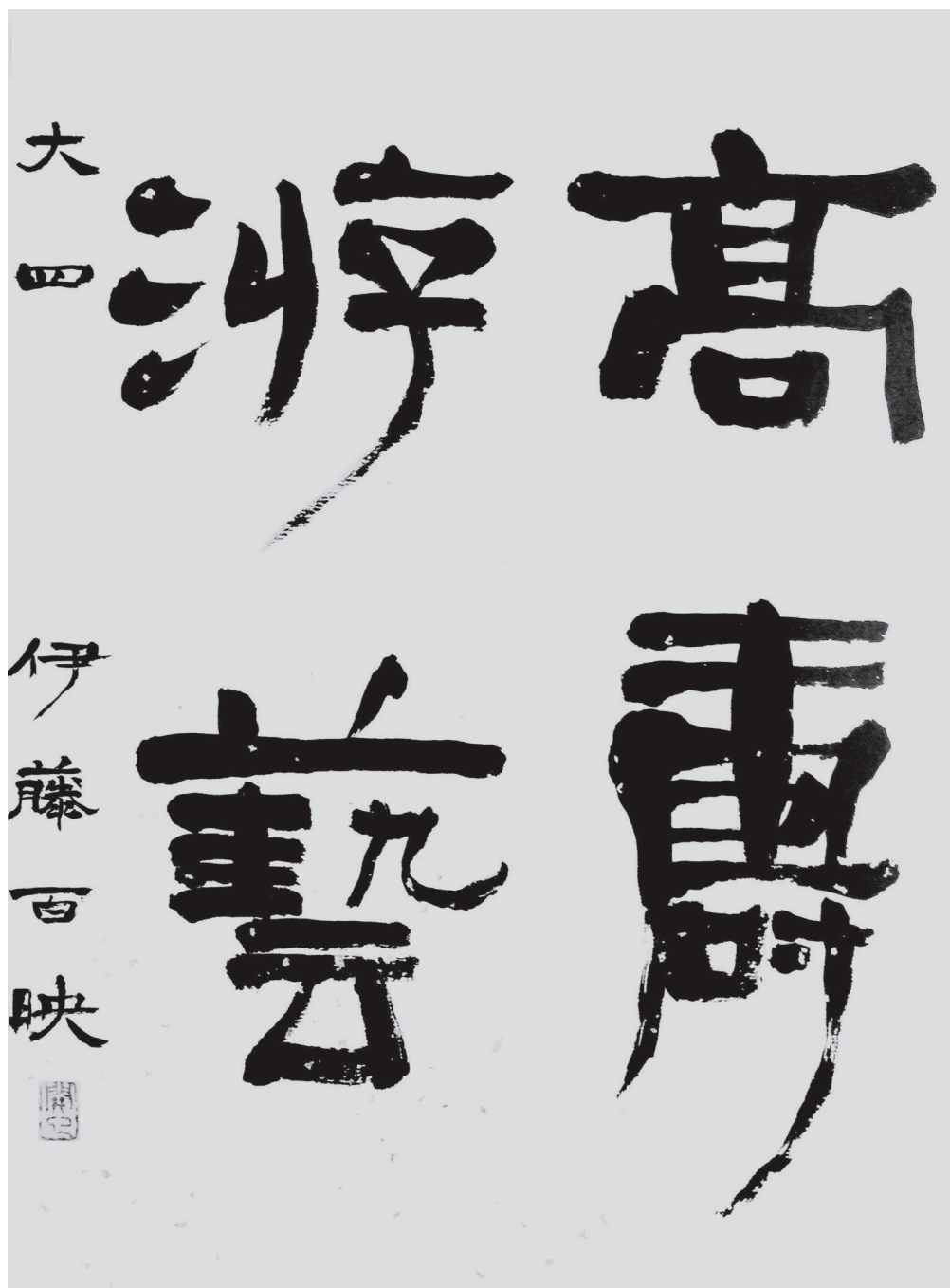
吉田 桜子

書道部門
学生（大学生）の部

最優秀賞

高壽游藝

二松学舎大学 四年 伊藤百映



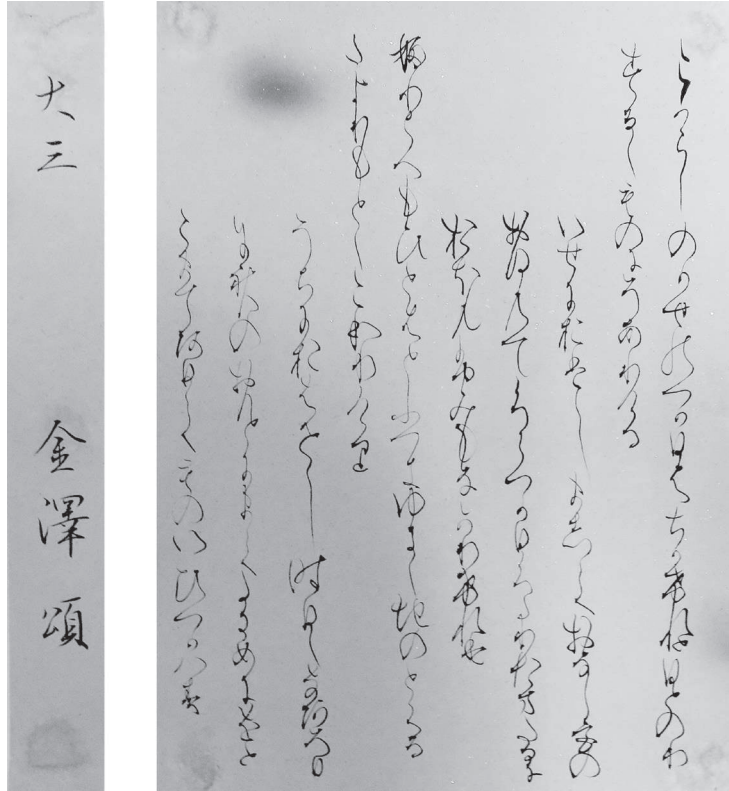
講評

何紹基の「張遷碑」
「禮器碑」等の漢隸臨書を集字して、いわゆる做書による創作作品である。書の古典臨書を充分なされたであろう筆法技術が発揮され、しかも漢隸の持つ朴訥な風趣が表現されている。「高壽遊藝」の四字句は、筆者の造語から成るものと考えられるが、漢学の素養をかなり積まれたであろうことが窺い知れ、書という芸術が、単に技術のみに偏った方向にある今日において、本来の書文化を追い求めた筆者の心の内面をも表現している秀作である。

優秀賞

臨 小島切

大東文化大学 三年 金澤 頌

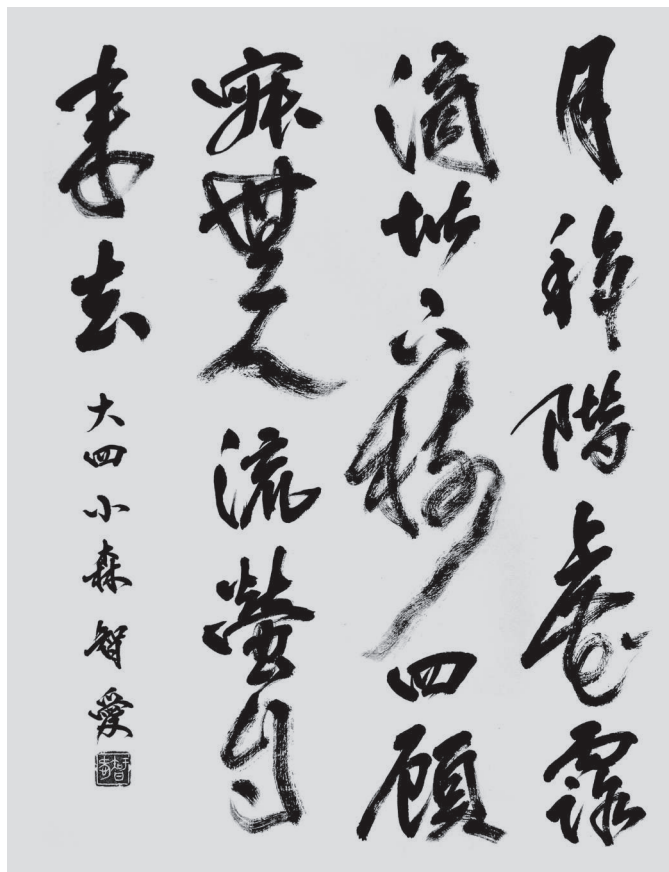


講評

かなの書美は線質、連綿、墨色、空間により生まれるが、今回、直筆と反動によって線の冴えを手に入れながら、古筆と向き合っています。太細の配合による行の余白の抑揚が美しく、学年、氏名への配慮も忘れていない。

鮑仁濟詩句

安田女子大学 四年 小森 智 愛



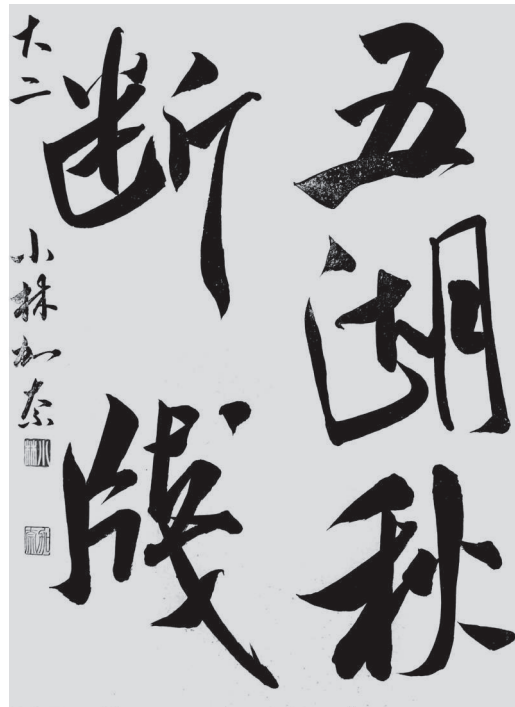
講評

明時代の鮑仁濟の『絶句』の詩を、行草で創作作品として仕上げた。絶句二十字を四行で、しかも行草で書くというのは構成面でかなり難しいものだが、まったく窮屈さを感じさせないばかりか、広がりさえ感じさせる絶妙な技である。

佳作



銘誌墓儁顯元
 二松学舎大学 三年
 三本木 かや乃



牋断秋湖五 創作
 二松学舎大学 二年
 小林 加奈



第十五卷經愚賢
 二松学舎大学 四年
 関 美咲

【入選】

「臨 吳昌碩石鼓文」

安田女子大学

四年 川面奈摘

「臨 蜀素帖」

二松学舎大学

三年 小林真歩

「牛橛造像記」

二松学舎大学

三年 永島蒼太

「創作 飄聲稀懷」

二松学舎大学

四年 長谷川真子

「臨 智永千字文」

二松学舎大学

三年 守口晏南

書道部門
生徒（高校生）の部

最優秀賞

張猛龍碑

千葉県立国府台高等学校 二年 林 愛子



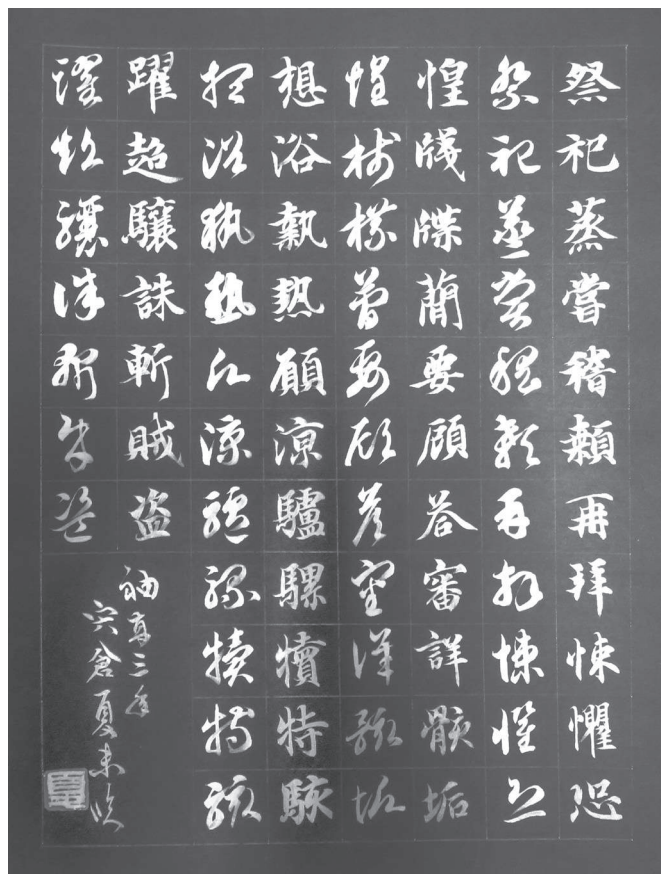
講評

北魏時代特有の右肩上がりの強い楷書、刀のような切れ味の鋭い線を充分に表現している秀作です。威風堂々たるこの時代の楷書は、単に右肩上がりが強いただけでなく、それを補うように左払いが長いことで、文字の構造のバランスを保っています。また、緊密な横線が並ぶなかでの美しい余白も評価できます。「魏」のハネに鋭さを、「太」や「張」の右払いに線の太細を取り込めば、更に充実した作品になるでしょう。

優秀賞

臨 智永真草千字文

千葉県立袖ヶ浦高等学校 三年 穴倉 夏未



講評

昨年は楷書のみでしたが、本年は楷書、草書に挑戦した意欲作。楷書、草書ともに、原本の筆意を十分に捉えた秀作で、穂先をきかせた起筆、毛筆の弾力を生かしたハネや払いなど、非常に見ごたえのある作品といえます。

臨 灌頂記

広島県立福山葦陽高等学校 二年 松山 琉之介



講評

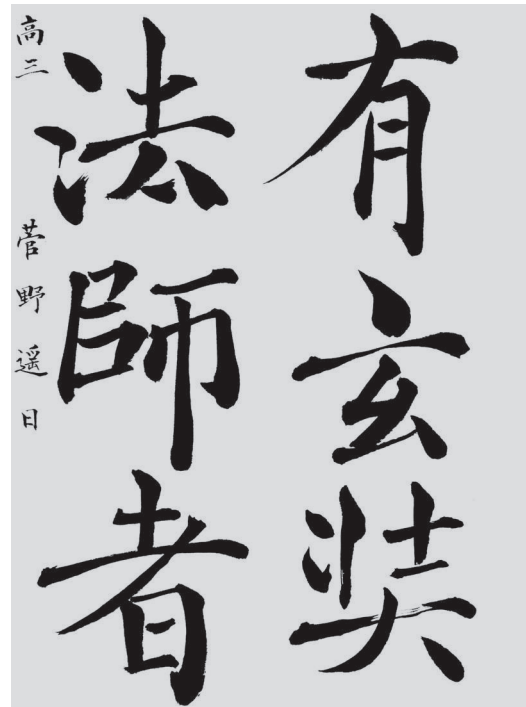
原本は、高雄山の神護寺で空海が灌頂という儀式を行った際の記録であり、いわば空海の日常の草卒な書がうかがえるもの。原本よりも、やや引き締めた造形で、濃墨を用いて、一気呵成に力強い筆致で表現しています。

佳作



臨 帛書

広島県立福山葦陽高等学校 二年
東 美 穂



雁塔聖教序

杉並学院高等学校 三年
菅 野 遥 日



趙之謙 大痴百歳四屏

千葉県立国府台高等学校 三年
六 浦 由花利

【入 選】

〔乙瑛碑〕	千葉県立国府台高等学校	一年	荒開	響	〔中務集〕	千葉県立国府台高等学校	三年	廣津	義史
〔隸書張衡靈憲四屏〕	千葉県立国府台高等学校	二年	池田	真歩	〔争坐位稿〕	愛媛県立松山南高等学校	二年	古川	可奈子
〔楊峴臨古四種卷〕	千葉県立市川南高等学校	二年	江端	真来	〔九成宮醴泉銘〕	市川高等学校	二年	松本	あかり
〔金農 隸書立幅〕	千葉県立国府台高等学校	三年	大浦	理奈	〔孫秋生劉起祖等造像記〕	志学館高等部	三年	松本	望
〔臨 始平公造像記〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	一年	梶原	実季	〔呉昌碩臨石鼓文〕	千葉県立国府台高等学校	二年	村瀬	アイリ
〔趙之謙 篆書立幅〕	千葉県立国府台高等学校	二年	金本	奈那	〔臨 智永真草千字文〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	一年	鎗田	真優
〔徽宗 瘦金千字文 臨書〕	伊勢崎清明高等学校	一年	河瀬	梨子	〔大字朗詠集〕	相模女子大学高等部	二年	渡辺	和音
〔魏靈藏造像記〕	千葉県立国府台高等学校	二年	小出	沙雪					
〔王鐸〕	千葉県立市川南高等学校	三年	齋藤	瑠輝					
〔臨 傅山行草書幅〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	二年	佐藤	菜々美					
〔臨 張遷碑〕	広島県立福山葦陽高等学校	一年	佐藤	七海					
〔臨 鄭羲下碑〕	広島県立福山葦陽高等学校	一年	三田	向日葵					
〔臨 石台孝経〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	三年	椎名	円花					
〔臨 道因法師碑〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	二年	白井	綾音					
〔高貞碑〕	千葉県立国府台高等学校	三年	杉本	真由					
〔居延漢簡〕	浜松開誠館高等学校	二年	鈴木	菜未					
〔西嶽華山廟碑〕	千葉県立国府台高等学校	二年	鈴木	優加					
〔臨 智永真草千字文〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	一年	立川	愛莉					
〔張猛龍碑〕	茨城県立水戸桜ノ牧高等学校	一年	田中	空見					
〔金文 千字文〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	二年	千脇	望美					
〔臨 薦季直表〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	三年	寺田	茜					
〔臨 光明皇后樂毅論〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	二年	飛田	麻莉亜					
〔臨 始平公造像記〕	千葉県立袖ヶ浦高等学校	三年	橋本	泰知					

書道部門
生徒（中学生）の部

最優秀賞

博愛精神

徳島県立城ノ内中学校 二年 木本実佑



講評

線に太細の変化をしっかりとつけ、気脈を終始一貫させ、文字のふところを広く構えて、本文の四文字を紙面いっぱい配字させている。作品がこちらへ広がり迫ってくる感じがする。文意と書の表現がマッチし、行書の特徴を十分に表出した作品である。名前の行書は、「実」のところにやや窮屈さがあるものの、本文に調和させている。中学生の行書作品として大変に好感が持て、最優秀賞となった。

優秀賞

輝く未来

青森市立浪岡中学校 二年 工藤 咲彩



講評

肉厚で温かみのある線と、余白の対比が美しく見える。一貫した気脈が、安心感を与えてくれる。文意を踏まえて、堂々とした作品。名前も上手く入れて入賞となった。「輝」字を「未来」より大きく見せていれば完璧であった。

維新黎明

江戸川区立小岩第三中学校 二年 中山 ころろ



講評

行書の特徴を活かした、リズムカルで歯切れの良いタッチの線が多用させて、気持ちよい・心地よい、そんな感じを抱かせてくれる作品。文意と書の表現がマッチして入賞となった。名前の「ろ」字が分断されてしまったのが惜まれる。

佳作



田園風景

海南省立下津第二中学校 二年
梶本千尋



臨 魏靈藏造像記

東松山市立南中学校 三年
大谷渚



筆墨硯紙

徳島県立城ノ内中学校 二年
北原花音

【入選】

「臨 楽毅論」	江戸川区立小岩第三中学校	二年	石川 真衣	「輝く未来」	前橋市立東中学校	一年	森田 真央
「至誠通天」	葛飾区立奥戸中学校	一年	伊藤 優奈	「銀河流星」	徳島県立城ノ内中学校	三年	安原 南
「初志貫徹」	徳島県立城ノ内中学校	三年	稲井 明香里	「田園風景」	川越市立城南中学校	二年	矢野 愛佳
「輝く未来」	練馬区立石神井中学校	二年	伊礼 円里	「相互扶助」	新島学園中学校	一年	山我 佳央
「夏雲奇峰」	徳島県立城ノ内中学校	二年	植田 遥菜	「大唐三藏聖教」	海南市立下津第二中学校	三年	山下 夢羽
「創意工夫」	徳島県立城ノ内中学校	二年	上田 優芽	「輝く未来」	伊勢崎市立宮郷中学校	二年	吉住 和奏
「天朗気清」	江戸川区立小岩第三中学校	三年	加藤 深月	「規範意識」	坂戸市立坂戸中学校	三年	渡部 咲雪
「田園風景」	海南市立下津第一中学校	二年	川乗 楓菜				
「運命の開拓」	黒石市立中郷中学校	二年	工藤 ゆらら				
「相互扶助」	鳥根大学教育学部附属義務教育学校	一年	栗岡 佑万子				
「確実な判断」	世田谷区立富士中学校	三年	黒田 圭佑				
「輝く未来」	黒石市立黒石中学校	一年	笹森 虹花				
「偉大な太陽」	弘前大学教育学部附属中学校	三年	須藤 大翔				
「規範意識」	海南市立下津第二中学校	三年	出口 ひまり				
「大地の恵み」	田舎館村立田舎館中学校	一年	中山 佑介				
「創造」	江戸川区立小岩第三中学校	一年	畑 結乃				
「夏空快晴」	徳島県立城ノ内中学校	二年	濱田 真愛				
「博愛の精神」	栃木県立矢板東高等学校附属中学校	三年	東 琴音				
「紅葉筆祭」	名古屋市立楠中学校	三年	尾藤 ななみ				
「気宇壮大」	葛飾区立奥戸中学校	一年	平嶋 葵				
「五穀豊穰」	白河市立白河南中学校	三年	穂積 英里奈				
「黄河文明」	徳島県立城ノ内中学校	二年	松永 逢由				
「文化遺産」	海南市立下津第二中学校	二年	松本 葵衣				

書道部門

児童

(小学生)

の部

最優秀賞

無限の力

鶴ヶ島市立鶴ヶ島第一小学校 六年 清水梨音



講評

迷いのない運筆で、力みなぎる作品に仕上がっています。漢字三文字に対し、平仮名一文字のバランス迄よく考えた配置ができました。「無」のレツカ四つの点の表情変化が見事です。「力」の第二画目の強弱の変化も素晴らしいです。また、名前も一点一画しっかりと書いており、作品の一部として調和しています。将来が楽しみです。来年も期待しています。

優秀賞

発 明

青森市立浪打小学校 四年 奈良 ひより



講 評

堂々と「漢字二文字」が強たくたくましく表現されています。国語科書写の基本となる点画の起筆・収筆の筆使いがきちんと備わっています。「発」の左払い、右払い共に、力が抜けきっています。

いと

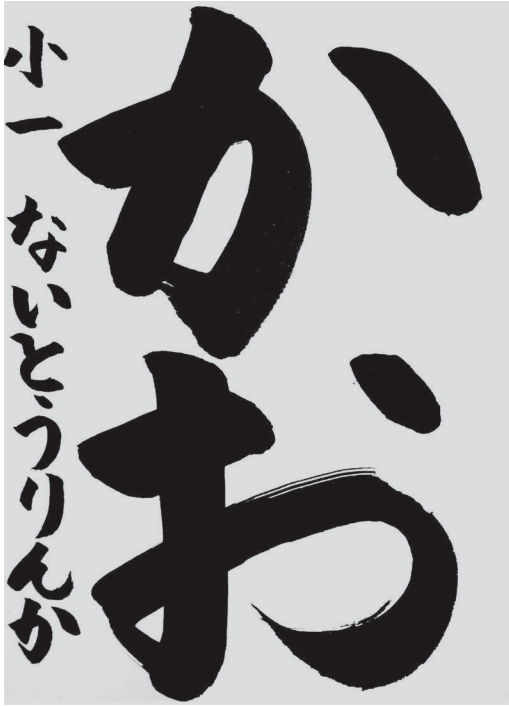
川島町立つばさ北小学校 一年 西村 祥汰



講 評

何といっても、起筆の打ち込みの強さに驚かされる。姿勢正しく、大きく腕を動かし、ゆったりと呼吸しながら書かれています。名前も一年生とは思えないくらいしっかりと書けています。

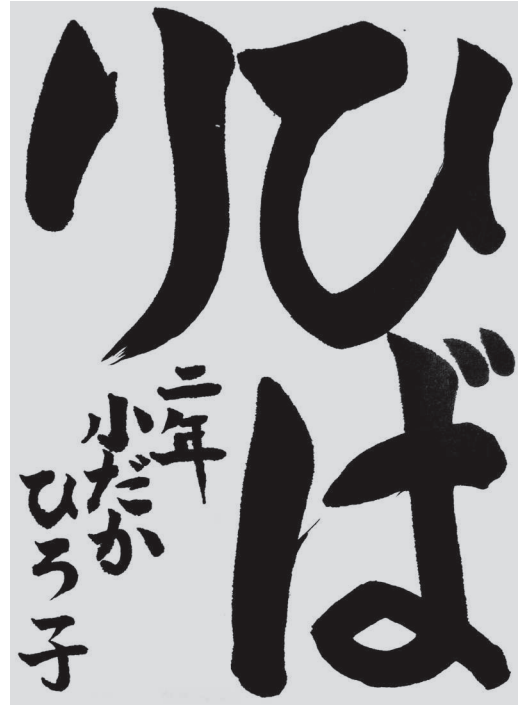
佳作



か お

高松市立栗林小学校 一年

内藤 綸香



ひばり

吉見町立南小学校 二年

小高 寛子



初 志

行田市立西小学校 五年

山本 萌果

【入選】

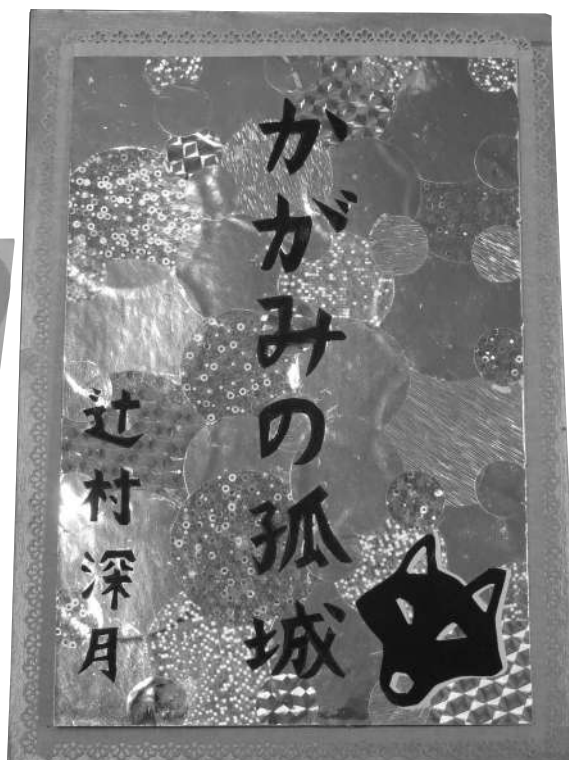
〔初志〕	呉市立呉中央小学校	五年	伊東 琥子	〔学問の道〕	葛飾区立奥戸小学校	六年	松崎 希々香
〔潮騒〕	葛飾区立細田小学校	六年	上門 心	〔新たな光〕	和歌山市立雑賀小学校	四年	的場 匠海
〔誠心〕	吉見町立東第一小学校	五年	大津 瑛	〔あき〕	八代市立千丁小学校	二年	蓑田 明恵
〔令和〕	仙台市立榴岡小学校	五年	男澤 恵実	〔初志〕	八代市立千丁小学校	五年	蓑田 菜摘
〔さくら貝〕	葛飾区立上小松小学校	三年	櫛田 りみ	〔土地〕	鴻巣中央小学校	四年	武笠 礼
〔雨水〕	葛飾区立奥戸小学校	三年	久保 詩絵空	〔ゆうやけ〕	熊谷市立石原小学校	三年	山口 駿
〔挑戦〕	川島町立つばさ南小学校	六年	小嶋 葵	〔故郷の山河〕	藤崎町立常盤小学校	六年	横山 龍桜
〔令和〕	青森市立浪岡野沢小学校	四年	齋藤 大河				
〔がんばる〕	黒石市立六郷小学校	二年	笹森 琉愛				
〔朝顔〕	黒石市立黒石小学校	五年	佐藤 舞子				
〔かい〕	堺市立浜寺石津小学校	一年	下田 修二				
〔生きる力〕	堺市立浜寺石津小学校	三年	下田 信一				
〔探究〕	新潟大学教育学部附属長岡小学校	五年	新保 心菜				
〔学問の道〕	葛飾区立細田小学校	六年	鈴木 理花				
〔かお〕	岐阜市立長森南小学校	一年	鷺見 完				
〔ひばり〕	秩父市立西小学校	二年	曾根 愛織				
〔夢は世界〕	江戸川区立上小岩第二小学校	六年	武田 莉知				
〔あき〕	高松市立木太北部小学校	二年	鳥谷 眞子				
〔希望の風〕	伊奈町立小針小学校	五年	羽田 絢音				
〔一歩前進〕	平川市立金田小学校	六年	原田 夏緒				
〔緑の埼玉〕	行田市立泉小学校	六年	藤井 紗姫				
〔希望の風〕	海南市立大東小学校	五年	前山 穂果				
〔吹奏〕	吉見町立南小学校	六年	増田 珠杏				

小說POP部門

最優秀賞

かがみの孤城

二松学舎大学 二年 坂口 那奈



講評

「読む」ことは、じつは「作る」ことかもしれない。POPという「モノ」を作ること、「意味」を作る。通常は二次元的なものが多いPOPだが、三次元的な構造をもつ作品には、「読者」作者」による解釈と編集のかけがえが明瞭に示されている。鏡をおもわせる扉＝表紙を捲ると、主人公が鏡の向こう側で辿りつく城が立ちあがる。小説の世界観をよく反映した本作品は、それをみる者を『かがみの孤城』の読者へと、さらには、文芸コンクール小説POP部門の作者へと変えてしまいうかもしれない、魅力的な扉＝鏡だといえる。

優秀賞

蒲田行進曲

二松学舎大学 二年 稲 友利絵



講評

落ち着いた色調でありながら、しつかりと人目を惹く構図になっています。あの有名な「階段落ち」の場面をシルエットだけで表現した技量も見事。小説の紹介文的確で、非常に好感が持てる一枚だと思います。

玄関の覗き穴から差しってくる光のように生まれただはずだ

埼玉県立春日部女子高等学校 一年 岡本 滯奈



講評

無垢で不穏な現代の高校生の気分を虚構化した歌集の中から選ばれたのは、「帰りたいくないからいる場所」としての教室の歌。そよ風が吹き、光が射す窓辺で、高校生は嘘の居眠りをする。明るく冷たい青春の風景がとらえられている。

佳作

幻想古書店で珈琲を

福岡県立筑紫高等学校 一年

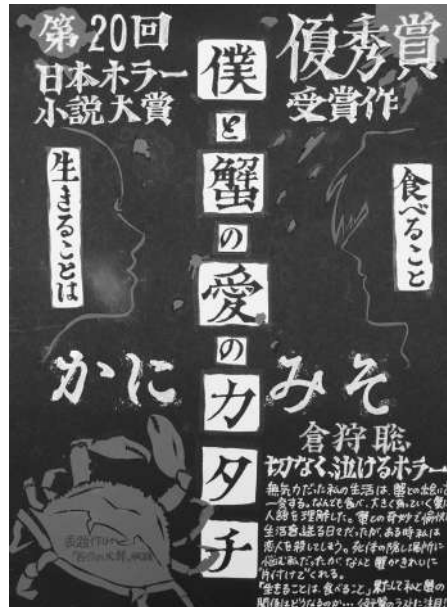
古賀 日女



かにみそ

二松学舎大学 二年

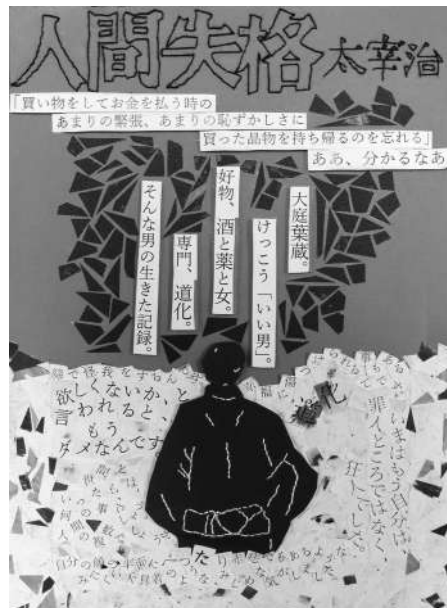
関谷 春香



人間失格

二松学舎大学 二年

二階堂 千翼



【入 選】

「屋上のテロリスト」	星美学園高等学校	一年	秋吉律子
「黒い家」	福岡県立筑紫高等学校	一年	飯盛駿人
「リボン」	茨城県立水戸桜ノ牧高等学校	一年	磯崎風花
「ようこそ、わが家へ」	埼玉県立春日部女子高等学校	一年	稲垣舞
「人間失格」	星美学園高等学校	一年	菊地ほの香
「カラフル」	福岡県立筑紫高等学校	一年	北村沙奈
「山月記」	和洋九段女子高等学校	二年	倉持希望
「エヌ氏の遊園地」	星美学園高等学校	一年	斉藤理子
「世界から猫が消えたなら」	星美学園高等学校	一年	佐藤芽温
「家守綺譚」	茨城県立水戸桜ノ牧高等学校	一年	茅根愛花
「ひきこもりの弟だった」	大阪府立農芸高等学校	一年	畑木実
「ぼくの海へ」	山梨県立中央高等学校	三年	松林琴乃
「こころ―心電図―」	大阪府立岸和田高等学校	二年	三上翼
「つめたいよるに」	星美学園高等学校	一年	村上瑠菜
「宇宙百貨活劇」	二松学舎大学	二年	森谷優香

学内感想文部門

最優秀賞

私達と坊っちゃん

二松学舎大学附属柏高等学校 一年 池田 愛生子

私は架空の人物と自分を重ねた『共感』を思い上がりだと思う事がある。理由の一つとして、現実的ではない極端な存在と自分を重ねるのは自惚れだと感じてしまうからだ。しかし坊っちゃんは決して完全無欠な人間ではなく、才ある人望溢れた人物でもない、現実味のある存在だ。更に、この物語は一貫して坊っちゃんただ一人の視点で語られる為、全ての事象が彼の思考、解釈を通して表現される。自らの無鉄砲さに振り回されながらも展開される彼の生き様は、時代の違いがあるにも関わらず読み手に親近感を覚えさせ、時に『共感』させてしまう魅力を持っている。坊っちゃんにはリアルな人間臭さがあり、人々の奥底にあるそれを素直に晒けだす様が自然と私達を引き込むのだ。

坊っちゃんは「こどもの時から損ばかり」と自身を形容しながらも、田舎の古臭い風習や人物の姑息さに悪戦苦闘し、なお自分の正義を曲げない。ほとんどの損は、自身を貫いた結果だ。私達は生きていく上でそれを痛感する。数多の『正しさ』がひしめき合う世の中で個人の正義を貫き通そうとするなら、損が対価として倍で帰って来る。それを知っているからこそ私達は坊っちゃんに惹かれるのだろう。逆境にも屈せず自身を見失わない姿。こんな時、私もこうしたい。私もこう言いたい。坊っちゃんへの『共感』に隠されているのは、理不尽に対する彼の在り方への憧れなのではないだろうか。

とは言え、作中での坊っちゃんへの風当たりは基本的に厳しい。しかし彼の正義は孤独ではないのだ。それを証明しているのが清の存在だ。清自身の出番は実はほとんどない。序盤で四面楚歌の状況の坊っちゃんを庇った姿が印象的だが、この時点では坊っちゃんは清の愛情を受け入れていない。清が多く登場するのは坊っちゃんの回想の中だ。坊っちゃんが清の愛情に気がつき、慕わしく思い始めた事が分かる。自分を貫くということは、頑なに受け入れず変わらないということではないのだ。

「こどもの時から損ばかり」と自身を形容していた彼は、なお自身を貫き、最後に大きな損をしてしまう。しかし彼がそれを損

だと感じている描写は無い。坊っちゃんの味方をした清は、彼の生き様に私達と同じものを見たのだろうか。彼の素直さに惹かれ、一種の憧れを抱いたのだろうか。なんにせよ、迂曲の末共に暮らした二人は、裕福でなくとも幸せだったように思う。富は二人を救わず、そこにはただ坊っちゃんの無鉄砲な正義があるのみで、それが全てなのだ。

私には「坊っちゃんのように生きてほしい」とは書けない。逆境に立ち向かってまで正義を貫く勇氣は無いのだ。しかし、坊っちゃんが時代を超えて開けた風穴は、私の心を軽くしてくれた。私は私なりに、私の足で逆境も順境も踏みしめて進んで行きたいと思える程に。

講評

「坊っちゃんのように生きてほしい」とは書けない。」という、締めくくりの一節が鮮烈でした。感想文の定型から離れることで、『坊っちゃん』の特性が見事にとらえられています。一人称の語りもたやす効果を十分に楽しみつつ、正義感を貫く主人公が清の大切さに気付いていく変化を的確に読み取っているのに感心しました。作品と対話して自己相対化ができる感覚は、貴重です。豊富な語彙力と共に、今後さらに磨いていくことを望みます。

優秀賞

坊っちゃん

二松学舎大学附属高等学校 三年 高橋雪乃

田舎は最悪である。誰がなにをどんな量食べていようがどうだっていいはずなのだが、狭い街では噂になる。知り合い同士がややこしい恋愛関係になっていたりする。狭さゆえ合わない人と距離を取ることができない。興味の対象がそれしかないことの恐ろしさもりもりと書かれていて埼玉の田舎育ちの私には面白く読みされた。

私はこの本を読み始める前、坊っちゃんという作品名と有名な「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」の一文から資産家に産まれた男の子の勇気ある冒険を覗ける話であると想像した。しかし読み進めると「たまに正直な純粋な人を見ると、坊っちゃん達の小僧だのと難癖をつけて軽蔑する」の意味で使われている坊っちゃんだとわかった。また冒頭から愚痴が止まらなくて驚いた。主人公は自らが正しいと思った事を曲げない性格ゆえにとにかく生きづらい性格である。自分の性を親譲りの無鉄砲という言葉で説明するが私は運命や他人を信じることのできるかわいらしい人であるとも言えると思う。中学校に赴任するまで「坊っちゃん」の言葉の意味を軽蔑を含めて使ったりする人はおらず良い意味での坊っちゃんとして生きていたのだと思う。嘘をつくな、正直にしると教わるのだから純粋なまま育った彼は正しい。しかし、それが良いとされる世界でなければ正直で純粋であることは単純であるとされ軽蔑の材料になる。坊っちゃんを褒める東京の清と馬鹿にする田舎の先生と生徒の対比が面白かった。

私は坊っちゃんの下手くそな生き方に憧れる。言葉だけは立派な赤シャツ達と真っ直ぐに戦い田舎を去る。上司を殴り東京へ帰る。世間からしたら坊っちゃんは負けたことになるのかもしれないけれど坊っちゃん自身に負けた気など微塵もない。不浄な地から離れ清と暮らす日常に戻っただけのことである。思った感情のままに行動できる坊っちゃんの姿に強く惹かれた。私がいかに坊っちゃんのように生きるの難しいと思う。今日から心に坊っちゃんを住まわせながら赤シャツでも着て生きていこうかな。

講評

小説冒頭の語りを愚痴と捉える感性や、世間から見れば負けたのに坊っちゃん自身に負けた気はないという指摘など、視点の面白さを評価しました。リズムのある文章で、締めユーモアも効いています。

優秀賞

久し振りの出会い

二松学舎大学附属柏高等学校 二年 廣 瀬 麻 奈

坊っちゃんに出会うのは、今回で三度目だ。どうせまた、以前二回と同じ様な感想を抱き彼の生き方を嫌ってしまうのだろうなあ。そう思いながらも、今の自分が彼と周りの人物にどんな感情を抱くか興味が湧いたので、改めて『坊っちゃん』を読み直してみる事にした。すると、人生で三度目になる彼との出会いは、今までとは大きく異なるものになった。初めて、坊っちゃんを格好良いと思えたのだ。

私は幼い頃から、自己主張をすることが得意ではなかった。自分がしたくない事でも周りの友人に気を使って一緒に行動し、後になりものすごく悔やむ。流される自分も後悔する自分も好きになれないような、こじらせた子どもだった。そんな幼い私にとって、自分の正義に基づいて生きる坊っちゃんは、自分が出来ない事を普通にやっつてのけるムカツク存在だったのだろう。過去の自分は、坊っちゃんに抱いた憧れや羨みを表現できず、「嫌い」という一言で済ませてしまったのだろう。そして、その言葉が現在の私に影響を及ぼして坊っちゃんを避けさせているのだろう。

ただ、高校生になった私は違った。自分が坊っちゃんの様な考え方も生き方も出来ない事を自覚したうえで彼のことを「格好良い」と表現できた。自分の成長を自覚できたように感じ、自分がどんな感想を抱いたのか整理できた瞬間、『坊っちゃん』を読んで良かったと感じた。私は、坊っちゃんのように自分の正義を相手に示す生き方はできないが、今の私のままでいいとたくさんの人に言われ自分が嫌いではなくなったので、素直な気持ちで坊っちゃんの活躍を楽しむことができた。高校で演劇を始め、自分の弱みも魅せ方次第で強みに出来ることや、個々の違いや癖が味になることを学べたことも今の私が『坊っちゃん』を素直に面白いと感じられた理由の一つだろう。

また、今の自分が坊っちゃんと同じ職業である高校の教師を目指していることも坊っちゃんに感情移入しやすいことにつながった。生徒に対して自然体で接し、自分の正義を貫く彼の姿は、生徒を自分と同じ一人前の人間として扱っている事を示している様に感じ、とても好感が持てた。「野だ」の様に権力を持つ人に媚を

売ることは簡単だが、自分より年下の相手への接し方は難しい。これを二十三歳という若さで、自然にできているのだから、彼は格好良いのだ。

今私が『坊っちゃん』に抱いている感想を知ったら、幼い頃の私はどう思うだろうか。きっと驚いて反発してくるだろうと思う。自分の周りの環境が変わり、少からず成長できた今、『坊っちゃん』をもう一度読むことができ、本当に良かった。今回の経験から、過去に読んだ事がある本をもう一度読み返すことの楽しさを知れた。あと十年くらい経ったら、もう一度読み返してみたくなった。

講評

過去に『坊っちゃん』を読んだ時の感想と、今回の読後の感想との違いが興味深く綴られています。作品を読むことで自分を発見するという読書の醍醐味の一つを、存分に伝えてくれる文章です。

【佳作】

- 「清のぬくもり」 二松学舎大学附属柏高等学校 一年 井川 華緒理
「清という存在」 二松学舎大学附属高等学校 二年 池田 治華
「坊っちゃん」と正義、それから愛」 二松学舎大学附属高等学校 三年 小平 萌乃

【入選】

- 「見守り続ける清の存在」 二松学舎大学附属高等学校 一年 石橋 雅人
「坊っちゃんを読んで」 二松学舎大学附属柏高等学校 二年 小菅 友花
「坊っちゃん」 二松学舎大学附属高等学校 一年 茅野 快飛
「坊っちゃんを読んで」 二松学舎大学附属柏高等学校 一年 畑中 綺斗
「まっすぐに応援される人に」 二松学舎大学附属柏中学校 二年 宮田 歩未

2019 年度 二松学舎大学主催
全国学生・生徒文芸コンクール
入賞作品集

2019 年 11 月 23 日

二松学舎大学 文芸コンクール係

東京都千代田区三番町 6-16

電話 03-3261-1285



二松學舍大學

<https://www.nishogakusha-u.ac.jp/>